書 第13回 書 評 ・ 評 論 コンクール

令和5年度

(2023年度)



Pensée 特別号

令和6年1月 発行 (2024年)

編集・発行 札幌国際大学図書館

目 次

書評•評論.	Jンクール 各員党員の皆様へ1
応募総数	
受賞者一覧	Ī 4
表彰式の様	子5
書評	
最優秀賞	私の心を動かしてくれたたった1冊の本 岡島 美羽 8
優 秀 賞	最も重要なこと 野村 菜々子 10
優秀賞	多様性の中の私とあなた 山口 沙羅 11
評論	
最優秀賞	気づかぬうちに「利他」がある 対馬 早希 14
優秀賞	現代宗教と科学の関わり方 棚橋 宏太 17
POP	
最優秀賞	『白ゆき姫殺人事件』湊 かなえ 著 天満谷 心 21
優 秀 賞	『ワニのガルド』 おーなり 由子 作・絵 細川 絢加 22
優 秀 賞	『汝、星のごとく』 凪良 ゆう 著 横田 花恋 22

書評・評論コンクール 各賞受賞の皆様へ

AI 時代と読書

札幌国際大学短期大学部学長 平野 良明

去る 12 月 14 日、第 13 回書評・評論コンクールの表彰式が行われた。新たに設けられた POP 部門への応募者を含めて 467 もの応募があったと聞き、さらに受賞代表者の「受賞の言葉」を聞いて、本学学生の学びの一端に直接触れることができたことを、嬉しく頼もしく感じた。

読書環境を取り巻く環境も加速度的に変化を重ねている。読書のかたちが紙媒体からスマホやタブレットによるものに移行しているらしい。そう言えば新聞もスマホで読むという人が増えている。

私は、と言えばスマホで読むニュースや、諸情報が記憶に残りにくいと感じている。即時性においては劣るが、紙媒体の新聞で読むニュースや多様な記事は心にしみこみ、拡がり、記憶として留まりやすいと実感している。

これは私だけのことなのだろうか。

幼児教育施設に行くとどこの園にも絵本が並んでいる、先生たちが子ども達に読み聞かせたい本、読んでもらいたい本を選び、子ども達の手の届くところに置いてある。先生に読んでいただいて好きになって、何度も手に取り、絵を見て楽しみ想像の世界を拡げる子ども達、繰り返し聞く先生の読み聞かせを記憶し、いつしか文字をなぞり、想像力を伴う文字の世界に誘(いざな)われていく。子ども達に愛された本は時に破れ、ページが取れたりもするが、先生たちはそれを丁寧に補修し、本棚に戻すことを繰り返している。

幼児期からの子どもと読書の未来について、幼児期からの人としての基本育てとかかわって早急に研究がすすめられなければならない。これから未来に育つ子ども達にとって、学ぶ力の基本育てのために、豊かな心を耕すために、本は大切な役割を果たすはずだ。

AI 時代に子ども達がタブレットから受ける恩恵は計り知れない。しかし私は、紙媒体によって育まれ、耕されるはずの学びの基本、心の基本が、それらの育ちの時間が切り取られている。

本を推す

総合情報館・図書館長 高橋 伸

今年新設された POP 部門には 226 点もの応募があった。POP を見ながら、これは「推し活」なんだと悟った。「本」という自分の推しを応援する活動としての POP。推しを見つけ、推しにのめり込み、推しを広める。なるほど力も入るわけだ。推し活は人生を豊かにする。本の推し活は、ペンライトやうちわを振ることはできないけれど、POP からは「この本いいよ」「この本読んでね」という思いが、ぐいぐいと伝わってくる。

以前、中学生の作った POP を書店で使ってもらう機会があった。中学生のつたない POP を目にした書店員さんが突然に涙を流した。「私達は仕事の合間の 5 分 10 分で POP を作る。でも、この子はこの一枚の POP を作るのに、どれほどの時間を費やしたのだろう。本にかける情熱という点で、私はこの子に負けています。」

そのように考えていけば、書評や評論も、いくぶん「推し活」の側面をもっているのかもしれない。1 冊の、あるいは複数の本と格闘しながら、本の素晴らしさや厳しさに、自分の思いや発見を重ねて推しを広める。

人に本を薦めたり薦められたりするのは、人生の中で長く続いていく楽しみの一つだ。私も 図書館へ行って、学生のみなさんの「推し本」を読んでみることにしよう。

応募総数

計 467 点

書評	
現代文化学科	2
国際教養学科	65
心理学科(臨床心理専攻)	55
心理学科(子ども心理専攻)	34
総合生活キャリア学科	38
幼児教育保育学科	35
合計	229

評論		
現代文化学科	10	
国際教養学科	1	
幼児教育保育学科	1	
合計	12	

POP		
現代文化学科	4	
国際教養学科	51	
心理学科(臨床心理専攻)	23	
心理学科(子ども心理専攻)	10	
観光ビジネス学科	38	
国際観光学科	1	
スポーツビジネス学科	38	
スポーツ指導学科	60	
幼児教育保育学科	1	
合計	226	

至	と部門を合わせた応募総 と部門を合わせた応募総	総数
	現代文化学科	16
	国際教養学科	117
	心理学科(臨床心理専攻)	78
	心理学科(子ども心理専攻)	44
大	観光ビジネス学科	38
学	国際観光学科	1
	スポーツビジネス学科	38
	スポーツ指導学科	60
	大学合計	392
短	総合生活キャリア学科	38
	幼児教育保育学科	37
大	短大合計	75
	応募総数	467

受賞者一覧

◆ 書 評 ◆

賞	学 科	学 年	氏 名
最優秀賞	総合生活キャリア学科	1	岡島 美羽
優秀賞	心理学科 臨床心理専攻	1	野村 菜々子
優秀賞	総合生活キャリア学科	1	山口 沙羅
佳作	総合生活キャリア学科	1	
佳作	総合生活キャリア学科	1	
佳作	幼児教育保育学科	1	
佳作	幼児教育保育学科	1	
佳作	幼児教育保育学科	1	
留学生特別賞	人文学部 国際教養学科	2	
留学生特別賞	心理学科 臨床心理専攻	1	

計10名

◆ 評論 ◆

賞	学 科	学 年	氏 名
最優秀賞	現代文化学科	3	対馬 早希
優秀賞	現代文化学科	3	棚橋 宏太
佳作	現代文化学科	3	
佳作	国際教養学科	2	

計4名

♦ POP **♦**

賞	学 科	学 年	氏 名
最優秀賞	国際教養学科	1	天満谷 心
優秀賞	国際教養学科	1	細川 絢加
優秀賞	幼児教育保育学科	1	横田 花恋
佳作	国際教養学科	2	
佳作	スポーツ指導学科	1	

計5名

表彰式の様子

令和5(2023)年12月14日(木) 図書館「黎明」にて



(左から) 細川さん・横田さん・天満谷さん・高橋館長・棚橋さん・対馬さん・岡島さん・蔵満学長 山口さん・野村さん・平野学長



















最優秀賞

私の心を動かしてくれたたった 1 冊の本

総合生活キャリア学科 1年 岡島 美羽

この本は私を変えてくれたとっておきの一冊だったので、この本で最優秀賞をとれたことはとても光栄に思います。本当にありがとうございました。この本は、これからの未来の考え方についてとても深く考えさせられるので、是非いろんな方に手に取って読んでいただきたいです。

《書評対象図書》



『「手紙屋」〜僕の就職活動を 変えた十通の手紙〜』

喜多川 泰<著> ディスカヴァー・トゥエンティワン, 2007年

将来就職するために、今大学で様々に 学んでいる方がほとんどだろう。そんな 大学生や、これからの進路にまだ迷って いる方に、絶対に読んでほしい1冊が 『手紙屋』だ。

私がこの本を読もうと思ったきっかけは、書店で「就職に迷っている方にオススメ!」という POP を見たからだ。試しに読んでみようという軽い気持ちで手に取った。読んでいくうちに私は、この

本と出会うことが運命だったかのように、将来への考え方が変わっていった。 ついに読み終わったときには涙していた。自分でも驚くほど、初めて本を読んで涙を流した。それほどこの本の言葉には心打たれた。

この本は、上京してきた一人の大学生が、ある喫茶店で「手紙屋」と出会い、アドバイスをもらうというお話だ。手紙で相談をすると手紙でアドバイスを返すというのが手紙屋の仕事である。この大学生が相談をする内容が、私の悩みと重なる部分が多く、読んでいると自分が手紙屋とやり取りをしているような感覚になる、不思議な体験だった。まるで手紙屋が「私」にアドバイスしてくれているようで、本に顔を近づけ、どんどん読み進めた。私にとても響く言葉ばかりで、心を動かされた。

一番響いた手紙屋の言葉は「人生という大海原に漕ぎ出すときに、その船が誰のものであるか、自分が船長か船員か、船は大きいか小さいか、実はどうでもいい。大事なのは、その船が何を目的として航海をするかだ。」というものだ。手紙屋はこのような例えで教えてくれるから分かりやすい。本の中の大学生と同じく、就職をするにあたって、少しでも大きな企業に就職したいと思うのは当然だろう。しかし手紙屋は、大きい企業だか

ら安定というわけではない、今は小さい 企業でも将来大きくなっていることもあ るなど、私には思いもつかないことを語 ってくれる。周りでこのようなことを教 えてくれる人はいなかったので、就職に ついて改めて、いや新たに考えさせられ た。物語では最後に、思いもよらない出 来事が起きるので、ぜひ読んで確かめて ほしい。

私は本を読むことが得意な方ではないが、この本は読んでいて飽きさせない工夫がされていて読みやすい。例えば、手紙屋と大学生の手紙でのやりとりでは、読者がわかりやすいように、異なるフォントが使われていたり、途中にきれいな写真と一緒に手紙屋のアドバイスがとじ込まれていて、続きが気になる本になっている。

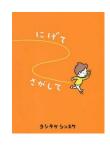
私はこの本を読んで、就職だけではなく、その先の将来についても考え方が変わったし、自分がどのように生きたいのか考えさせられた。悩み事がある人、将来を変えたいと思っている人、就職に困っている人など、色々な方に読んでいただきたい。一度読んだら、きっと何かが変わるだろうと思う。

優秀賞

最も重要なこと

心理学科 臨床心理専攻 1年 野村 菜々子

《書評対象図書》



『にげてさがして』

ヨシタケ シンスケ<著> 赤ちゃんとママ社, 2021年

本書は、自分を大切にする方法を絵本を通して分かりやすく伝えている。現代では、嫌なことから逃げずに立ち向かうことこそが正しく勇気ある行動だと説く話が多く存在する。しかし、この本は、逃げることも勇気ある行動であり、逃げることで新しい世界に出会う可能性が広がると教えてくれている。若い世代に大切にしてほしい言葉が沢山詰まっているため、是非一度読んでみてほしい。

この本のポイントは、あたたかい絵柄で全ての人を肯定している所にあると思う。「人の気持ちを考えられない人」ではなく「想像力を使うのが苦手な人」という言葉から作者の優しさが伝わってくる。困った時は自分を大切に思ってくれる人の所に逃げていいという言葉は、実

は小さな子どもより、自立しなければと 考えている私達の方が大事にしなければ ならない考え方ではないだろうか。自分 に勇気をくれるのは同じ世界にいる人間 だとは限らない。映画の中にいるかもし れないし動物かもしれないし、ずっと昔 に生きていた有名人かもしれないのだ。 世界中の国を訪れたり、宇宙旅行に行っ たりしても、それはまだ狭い範囲でしか ないのだ。

本書のあらすじは、世の中には色んな 人がいる。人に傷つけられたらするべき ことは、とにかくその人から逃げるこ と。自分を守るためにその場から離れる ことである。そして、絶対にいる自分の 理解者をさがしてほしい。そのために足 がついている、ということを伝えてい る。自分の理解者が同世代とは限らず 様々な所に自分を守ってくれる人がいる かもしれない可能性を書いている。普段 の生活に疲れて、自分は一人だ、孤独だ と思った時にこの本を読んで新しい可能 性を感じてほしいと思う。嫌なことから 逃げるために離れたとしても、また動き 続けたらそれは"逃げた"のではなく新し いことに挑戦し"向かう"ことに変わるの ではないか。この本を読み終えた時、読 者はきっとあたたかい気持ちと大きな愛 情で満たされるだろう。

優秀賞

多様性の中の私とあなた

総合生活キャリア学科 1年 山口 沙羅

《書評対象図書》



『サード・キッチン』

白尾 悠<著> 河出書房新社,2020年

実は皆、差別の被害者であり加害者である。白尾悠さんの『サード・キッチン』は日常の中の差別を意識させてくれるとても深い一冊だ。私は『サード・キッチン』を読むまで、差別を意識してはいなかった…というより、知識が無かったのだ、と思い知らされた。

幼い頃に父を亡くし、母子家庭で育った尚美は、ある親戚からの援助で憧れだったアメリカの大学に留学した。しかし、たどたどしい英語になれない文化の中で孤独な尚美は、馴染めない自分に怒りや悲しみを持ち、日々を過ごしていた。

ある日、隣室のアンドレアと出会う。 彼女は尚美の良き理解者となってくれ 「サード・キッチン」に誘ってくれた。 そこはマイノリティ学生のためのセーフスペースだった。そこで、充実した生活を送りながら尚美は、人種、性別、言語など、世界が抱える差別の問題を目にする。「私は意思疎通の出来ない生き物かも」しれないと考える尚美を通して、私たちも知らなかったことと向き合い、考えることが出来る、そんな作品だ。

カレーの国はどこだと聞かれたら、私は迷わずインドと答えるだろう。私は本書でステレオタイプというのを初めて認識した。「日本人はトヨタのように器用で繊細だ」というようなジョークで消化できるステレオタイプだけでなく「黒人はいつもトラブルメーカーだ」という差別的なステレオタイプ。日本で暮らし、自然に抱いてきた膨大なイメージたちも、差別につながるのではないかと尚美は考えるようになる。

「都会の人は冷たそう」などと、SNSで見かけたことはないだろうか。「ステレオタイプ」は私たちの身近にいくつもある。

「無知も無関心も差別」というのは、 作中に出てきた言葉だ。世界中には、歴 史問題や政治問題など、安易に触れては いけないと言われる事はあるが、私たち が今まで学んだ歴史や社会は「無知によ る差別」をしないための学習だったのだ と、私は深く考えさせられた。相手を差 別しないため、自分が差別されていると 気付くため「知識と関心」が必要である のだと、強く心に響いた。

様々な差別の存在や、それを説明する 言葉は、私が今まで知らなかったことば かりだった。目の前に広がる新しい世界 に直面したら私はどうするだろう、どう すべきだろう。自分以外の他人、自分と は異なる世界、人々に目を向けることの 意味を、海外に行かなくても、住まなく ても、この本を通して考えることができ ると私は思う。

他の多くの方にもぜひ、『サード・キッチン』を通して、世界中の問題や自分自身の存在の意義を「考えて、考えて、考える」ことをして欲しいと思う。きっとまだ、結論は出ないだろう。知らないこと、知らない世界はまだたくさんあるのだ。しかし、視野が広がれば、少なくとも私たちは、きっと誰かの、良い「理解者」となれると私は思う。



最優秀賞

気づかぬうちに「利他」がある

現代文化学科 3年 対馬 早希

「自分の考え」と「学者の方々の考え」を 比べ、その共通点と相違点をまとめることが難しく、満足のいく出来にはならなかったのですが、最優秀賞という評価をいただけたことがとても光栄で、ありがたいです。4年生での卒業研究も、全力で取り組みます。

1. はじめに

近年、よく耳にする「利他」という言葉。ある人は「自分の長所は利他的なところです。」と主張することもあるが、

「利他」とはいったいどういう意味なのか。「利他」とは何かと聞かれると、多くの人は「利己の反対が利他である」とし、「自分ではなく他人の利益を優先することだ」と述べるだろう。

はたして、本当にそうなのだろうか。 「利他」とは、人に優しくするという単 純なものなのだろうか。人の手助けを し、親切にサポートすることなのだろう か。こうした「他人を最優先にするこ と」すべてが「利他」になるのだろう か。

2. 伊藤亜紗の見解

東京工業大学にある人文社会系の研究 拠点「未来の人類研究センター」では、 「利他」に関する研究が行われている。 研究メンバーの一人であり、美学者でも ある伊藤亜紗は、自身も執筆を担当した 論考集『「利他」とは何か』(2021.集英 社)の中で、「利他の大原則は、「自分の 行為の結果はコントロールできない」と いうことなのではないかと思います。」 と述べている。

伊藤曰く、利他的な行動の本質には 「私の思い」が含まれており、それは単 なる「思い込み」でしかないそうだ。

「「これをしてあげたら相手にとって利になるだろう」が「これをしてあげるんだから相手は喜ぶはずだ」に変わり、さらには「相手は喜ぶべきだ」になるとき、利他の心は、容易に相手を支配することにつながってしまいます。」と伊藤は言う。

この見解については、伊藤の著書である『目の見えない人は世界をどう見ているのか』(2015.光文社)に触れると理解が深まる。視覚障害者に焦点を当てたこの本の中で、伊藤は、見える人と見えない人の関係は「情報」ベースになりがちであると述べた。「見える人が見えない人に必要な情報を与え、サポートしてあげる。」という「情報」ベースの関係

が、両者の関係性を固めてしまい、見える側が「よく分からないからこそ、先回りして過剰な配慮や心配をしてしまう。」のだと伊藤は言う。そのうえで、

「障害者に対する悪意ある差別はもって のほかですが、実は過剰な善意も困りも のなのです。」と述べていた。

この「過剰な善意」がなぜ困りものなのか、考えてみてほしい。見える側は見えない側のことを思い、自分のできる限りのサポートをする。声をかけ、腕をとり、間違っても怪我がないように相手の周りにある全ての情報を伝える。そこには悪意など全くなく、「こうしたほうが良いだろうな」という思いのもと、100%善意で行っている。

しかし、そうした善意は見える側の「思い込み」でしかなく、見えない側からしてみれば「できること」も「できないこと」とされ、すべてを取りあげられていることと変わらない。ある一定のラインまでは親切であったとしても、そのラインを越えてしまうとただの「ありがた迷惑」でしかないのである。

つまり、「人に優しくする・手助けをする・サポートをする」といった「善意」は、受け手にとってみれば単なる「思い込み」でしかないということだ。「私の思い」=「相手の思い」ではない。伊藤が利他の大原則としても述べた

ように、「行為の結果はコントロールできない」ため、善意からなる行動は「善意」という名の陰に隠れた「思い込み」であって、「利他」ではないと考えることができる。

3. 中島岳志の見解

「未来の人類研究センター」のメンバーでもあり、政治学者でもある中島岳志も、伊藤が述べた「自分の行為の結果はコントロールできない」という利他の大前提と同じような見解を述べていた。中島は、著書『思いがけず利他』(2021.ミシマ社)の中で、「利他」と「利己」は反対語ではなく、つながっているのではないかと述べている。「利他的なことを行っていても、動機づけが利己的であれば、「利己的」と見なされますし、逆に自分のために行っていたことが自然と相手をケアすることにつながっていれば、それは「利他的」と見なされます。」と中島はいう。

こうした考えのうえで、中島は「与え 手が「利他」だと思った行為であって も、受け手にとってネガティブな行為で あれば、それは「利他」とは言えませ ん。」とし、「私たちは、与えることによ って利他を生み出すのではなく、受け取 ることで利他を生み出します。」と述べ ている。 確かに、口では他人のためだと言いサポートを行っているが、その実「こうすれば周りから良い評価が得られる」「巡り巡って自分のもとに利が返ってくる」などと考えているのであれば、それは「利他」ではなく「利己」である。また、当初は利他的な意識を持っていたとしても、途中で意識が「自分」へと変化しているのであれば、それも「利他」ではなく「利己」であるといえるのではないか。

つまり、「利他」を「利他」として成り立たせるのは、「与え手」ではなく「受け手」であるということだ。いくら利他的意識を持とうと、善意で行動を起こそうと、重要なのは「受け手の気持ち」であって、そこに「与え手の意志」は関係ないのである。中島が述べたように、「利他的行動の根本が「利己的」ならば、それは「利己」だ」という言葉により、「利己の反対が利他である」とはいえないと考えることができる。

4. 私の考える「利他」

「「利他」とはどういう意味なのか」 について、私は「自分の行動が自分の知 らない場所で誰かのサポートとなってい ること」、そして「その誰かがその人に とっての利益を得られていること」が 「利他」だと考える。そこに自分の意志 はない。あったとしてもそれは、「優しくしたい」「誰かを助けたい」「誰かに喜んでほしい」ではなく、「何にもならないけど、とりあえずやっておこう」といったものだけである。

重要なのは、自分の行動の受け取り先が「不特定多数の誰か」であることだ。 顔も名前も、どこの誰かもわからない相 手が、何気なく行った自分の行動によっ て、何らかの利益を得られることが何よ りも大事なのである。

また、利益のもとが自分であること、 相手が誰であるかということは一生分からずに日々を生き、人生の最期を迎えられればそれでよいのではないかと私は考える。

参考文献・引用文献

- ・伊藤亜紗『目の見えない人は世界をど う見ているのか』(2015年)光文社
- ・伊藤亜紗編、中島岳志、若松英輔、 國分功一郎、磯崎憲一郎『「利他」とは 何か』(2021年)集英社
- ・土井善晴、中島岳志『料理と利他』 (2020年) ミシマ社
- ・中島岳志『思いがけず利他』(2021 年) ミシマ社
- ・ヨシタケシンスケ、伊藤亜紗『みえる とかみえないとか』(2018年) アリス館

優秀賞

現代宗教と科学の関わり方

現代文化学科 3年棚橋 宏太

1. はじめに

唯一の被爆国であり、核の脅威を知っているはずの日本人が原子力に頼りきりになっているのか。原子力発電は危険ではないのか。これはいわゆる日本の原子力発電に対する安全神話と必要神話に対する批判である。(島薗,2013)この批判は2011年3月11日に起こった東日本大震災および福島原発事故でさらに加速し、現代科学の危うさを私たちに教えしらしめるものとなった。

事故の影響により原子力発電所の稼働はすべてストップし、今もなお再稼働賛成派と反対派による対立や核廃絶運動といった動きがみられている。これは、事故以前の科学に対する人々の認識への反動であると考えられる。認識というのは次のようなものである。すなわち本来人を幸せにするための道具である科学技術が人々の欲望に暴走している。その結果、利便性を求めるあまり制御できない領域に手を出し、科学で全てを支配できると考えているために制御できないものはないというものである。本稿ではなぜ

人は科学を絶対視し、信仰といってもよいほどに信頼するのか(2節)、科学技術はなぜここまで暴走してしまうのか(3節)、そして科学と相反する存在である宗教とはどんなものであるのか、どんな力を持っているのか(4節)、最後にこれらを踏まえて科学技術の発展による暴走はどうすれば止めることが出来るのか考察していく(5節)。

2. なぜ科学を「信仰」するのか

池田(2007)によれば人々が科学を絶対 視する理由として、科学が自然の中から 繰り返し起きることを見出して、それを 法則という形式で記述するものであり、 繰り返し起きることや例外が発生する時 やたった一度しか起きない現象には無力 であるという認識を一般の人が出来てい ないということを挙げている。また、い ま一つの理由として現在人々にとって高 等教育までに行われる科学教育が大量の 知識を詰め込み、上記の科学の特性や科 学でコントロール出来ないものについて は教えないという点が挙げられる。それ ゆえ、「科学はすべてをコントロールで きるのだ」と錯覚し、万能であると絶対 視してしまうようになる。次の節では、 科学技術の暴走がなぜおこるのかについ て書いていく。

3. 科学技術の暴走

科学技術はなぜ人々の欲望により暴走 するのか。池田(2007)や村上(2021) によれば、その理由として、今日の科学 というものがきわめて金のかかるものに なり、社会のニーズに応えなければ研究 資金を得ることが出来なくなったという 点が挙げられる。その結果、直接的な市 場価値のあるものにのみ資金が集中する 形になっている。さらに資本主義社会と いうものが欲望を解放し、同様に社会が 非宗教化することにより、無制限のもの となっていった。無制限になった欲望は より便利により快適にと際限なく膨らん でいく欲望を満たすために科学は技術と 結びついて成果を出しており、さらなる 欲望を作り出しさえしているのである。 以上の議論をふまえて、このような科学 と技術の暴走をどうやって止めればいい のかを考えていく。

4. 宗教と科学の関わり方

私が科学と技術の暴走を止められる力を持つと考えているのは宗教である。池田(2007)によれば、宗教はかつて現在の科学のように最大の公共性を持つものであった。つまり宗教は信じて当たり前のものであり、死後の世界などは自明のもの、死後幸せな世界に行くために信仰していたのである。しかし、現在は現世で

の幸せな牛活こそ一番であり、最大の公 共性を科学に譲ることとなってしまっ た。このような現状で宗教が科学を押し 退けて信仰されるには、科学技術では手 に入らないものを手に入れることができ るとアピールしなければならない。それ は「かけがえのない私」といったもので ある。これを踏まえて考えられるのは、 宗教は物質的な充足ではなく、精神的な 充足を得ることが出来るという点であ る。この事は、上述した福島原発事故に 対して日本の各種宗教団体が出した声明 にも色濃く現れている。島薗(2013)が纏 めた声明によれば、「すべての命を大切 にし、未来のいのちを守っていくために も原発に頼った生き方は危険である」、 「人間の管理能力を超えるような力を持 つ放射性廃棄物を安全に管理するのは不 可能である」、「そのため原子力発電に頼 らない社会を実現することが急がれるし

つ放射性廃棄物を安全に管理するのは不可能である」、「そのため原子力発電に頼らない社会を実現することが急がれる」というように過度な物質的な充足を否定し、「生活スタイルを見直し、小欲知足(足るを知る)の心を養い、簡素な生活の中に幸せを感じること」を推奨しているのである。最後の節では宗教の特徴を踏まえた上でどのように科学技術の暴走を止めるべきか、論じていく。

5. 暴走を止めるために

2 で記述した通り、現在人々は科学の 本質について正しい知識を持たず、科学 は全てをコントロール出来るといった錯 覚に陥っている。そして3で記述した通 り、科学が社会のニーズに応えなければ ならず、そして資本主義社会により、欲 望が際限なくなったことによって科学技 術は暴走し、本来支配出来ないものも支 配しようとしてきた。その結果支配出来 ない自然現象や原子力発電によって多大 な被害を受けてしまった。これは科学技 術の暴走の弊害といって間違いないだろ う。これにより安全神話や必要神話が崩 れ去り、脱原発や核廃絶運動も起こって いった。そんな中で科学と相反する精神 的充足をアピールポイントとし、過剰な 物質的充足を否定し「足るを知る」生活 をと訴える宗教の考えは人々の欲望を抑 えるためのブレーキとして機能するだろ う。宗教の考えを取り入れて生活するこ とで、科学は人の管理出来るところまで で落ち着き、物質的にも精神的にもある 程度満たされた生活を送ることが出来る のではないだろうか。

参考文献・引用文献

- ・池田清彦「科学とオカルト」 (2007 年 講談社)
- ・島薗進「福島原発災害後の宗教界の原発批判―科学・技術を批判する論理的根拠」(『宗教研究』87巻 2013年 107~128ページ)
- ・村上陽一郎「文化と科学/技術」 (2021年 岩波書店)



最優秀賞

«POP 対象図書» 白ゆき姫殺人事件 『白ゆき姫殺人事件』 国際教養学科 1年 湊 かなえ<著> 天満谷 心 集英社, 2012年

私にとって本は、部活動で怪我や貧血で走れなく気持ちが沈んでいる時、いつも支えてくれて 次への活力を与えてくれる存在です。皆さんにも心の支えを見つけてほしい、そのきっかけを提 供したいと思い今回応募しました。好きな作者の本で最優秀賞をいただき感激と感謝の気持 ちでいっぱいです。この度はありがとうございました。

優秀賞

ワニのガルド

国際教養学科 1年 細川 絢加

«POP 対象図書»



『ワニのガルド』

お-なり 由子<作・絵> 偕成社, 2022年



優秀賞

汝、星のごとく

幼児教育保育学科 1年 横田 花恋

«POP 対象図書»



『汝、星のごとく』

凪良 ゆう<著> 講談社, 2022年



図書館発行誌『Pensée』について

『Pensée』とはフランス語で「パンセ」と読み、哲学者パスカルの有名な言葉「人間は考える葦(=roseau pensant)である」の「考える(penser)」から名づけられました。

Pensée 特別号

第 13 回 書評・評論コンクール 令和 5 年度(2023 年度) 最優秀賞・優秀賞受賞作品 令和 6 年(2024 年)1 月 発行

編集·発行 札幌国際大学図書館

〒004-8602 札幌市清田区清田4条1丁目4-1

T E L: 011-881-6722

E-mail: toshokan@siu.ac.jp

※作品は作者の表現を尊重するため、原文のまま掲載しております。

無断での転載・複写を禁じます。